# 勝敗を超えた先にあるもの

先日、一年生にとって初めての体育祭が行われた。会場がシェルコム仙台ということも、小学校の運動会とは違った雰囲気のある行事だったのではないだろうか。また、皆が本気になって走る姿、団結して跳ぶ姿、力一杯踏ん張って綱を引く姿、素早く玉を集めて入れようとする姿、仲間を懸命に応援する姿など、それぞれが一生懸命で、見ていて清々しいものだった。各クラス、長縄跳びでは練習の記録を塗り替えて、オールメンバーリレーでは練習よりもゴールタイムを大幅に更新した。当日までの間に、何かしらの軋轢があったかもしれないが、本気で取り組むことの楽しさや、皆で力を合わせることの高揚感や達成感を、各クラスが味わえたのではないだろうか。

さて、競技が終われば結果が出る。仕方がないことだが、勝敗や順位がつく。１位や優勝といったものは、一つしかない。そこにしか価値がないとすれば、「競技」と言われるものに取り組むことで得られる何かを手にする人達は、ごくわずかだ。だから、１位や優勝といった結果以外にも、手に入れられる価値があるはずだ。皆にとって、勝敗を超えた先にある何かを感じられた体育祭だったのならうれしい。

# 「フードボックス設置」から、何を考える？

１０月１６日付けで、「一般社団法人・フードバンクせんだい泉」から、七北田中学校の生徒に、「フードボックス設置のお知らせ（以下、「文書」）」が配付された。取り組み内容は、「フードロス対策の一環として、ご家庭で食べきれない食品を、昇降口のフードバンク回収箱に提供してほしい」というものだ。先生は、この「文書」が配付されたとき、皆にとって、これが社会を見つめる機会の一つになってほしいと思ったので紹介したい。

「文書」には、「私たちの暮らす日本では、一日に、国民一人あたり、ごはん茶碗一杯分、（食べ物を）廃棄している状況にあります。集められた食品などは、当団体が責任を持って困った人に配付する活動に活用させてもらいます」と書かれてある。日本の人口は現在、１億３千万ほどだ。つまり、毎日、１億３千万杯の量の食べ物が、食べられずにゴミになっているということだ。その一方で、食べることに困窮している実態があるから、不要となった食品を集めて、困っている方々に「いずみワクワク食堂」などを通して提供している。官民問わず、こうした取り組みは全国津々浦々で行われるようになってきている。これは、「廃棄しているのに食べられない人がいる」、「食品があるのに手に入らない（買えない）」ということを物語っている。変だと思わないか。

「文書」には、「SDGs が掲げる 17 の目標のうち、６つ（下記）に貢献します」とも書かれてある。SDGs とは、地球的規模で発生している様々な課題を解決するために、世界中の国が 2030 年までに達成する目標として国連が定めたものだ。皆も知っての通り、その最たる課題としてあげられるのは「気候変動」だが、「満足に食べられない」などの、人が健康に生活できない現状が、世界中にあるということだ。なぜだろう。

社会はもともとあるのではなく、人々によってつくられている。つくられているから、不具合が生じてきている。不具合を起こすのも、解決していくのも人だ。身近な出来事から社会を見つめ、解決していく鍵は知識だ。中学校で学習する知識で、かなり社会を見つめる視点が育つ。学習する意味は、ここにあると先生は思う。